アシスト

市川市サッカー協会第４種委員会　委員長　石原孝幸

離れて、立ち止まって、思う事

ウイルス禍のため２月末から学校が休校となり、校庭も市のスポーツ施設も使用禁止となってすでに２カ月半。オンラインはさておき、サッカーのできない状況が続いています。さらに千葉県は緊急事態宣言が解除されませんでしたので、今の状態がもう少し続いてしまいそうです。サッカーをやりたくてたまらない子ども達のことを考えると、少しでもできるようにしてあげたいのですが、気持ちだけが空回りしています。
沢山の方からサッカー活動**再開の見通し**について質問されますが、今の所見通しが**立たない**のが現状です。今風に言えば出口が全く見えない状況です。学校にも行けず、外出も制限され、群れて遊ぶこともできず、家で過ごしている子ども達の我慢も限界ですから、何とかしてあげたいのですが…。

私は 30 年以上、ほとんど毎週末、何らかの形で４種委員会のサッカーの催しに関わる生活をしてきました。今の仕事となってからも、平日も毎週１日は所属するクラブでコーチをしてきましたので、こんなに長い間子ども達と離れていたことはありません。また、子どもの成長を共に見守ることで繋がることができたコーチの皆さんとも離れていなければならず、我慢するしかない寂しい状況が続いています。
一方、離れていることで時間も生まれました。特に土日はたっぷり。興味があったことに挑戦してみたりしたのですが、今の所三日坊主で終わっています。時間が生まれたことでゆっくり色々なことを考えることもできました。今までと比べたら、今の状態は確かに異常事態なのですが、異常事態だからこそ見えてきたこともありました。ずっと走り続けていた人が、立ち止まって周りを見渡してみたという感じです。

子どもや仲間と少し**離れ、立ち止まって考えたり感じたりしたこと**の中で、サッカーに関することや子どもに関することをお話しようと思います。

まずはサッカー活動の再開についてです。このことを考えると頭が痛くなってきます。
まず、学校が再開されないことには、サッカーで子ども達を集められません。「3 密」を避けられない学校が、子ども達の安全を考えて長期間休校にしているのですから。また、学校が再開されたとしても、校庭を以前のようにすぐにサッカーで使えるかというとそう簡単ではないと思います。学校が再開されても、学校開放は再開しない可能性があります。何故かというと、学校を再開させただけでも感染リスクが高まるのに、学校を開放させるとさらにリスクを高めることになってしまうからです。学校で感染者が出たらその学校は休校でしょうから…。考えれば考えるほど、**ままならない現実**に引き戻されます。

このようにサッカー活動の再開について考えていたら、ドイツではブンデスリーガが再開されるとのニュースが飛び込んできました。「ということは、一般や学生、児童生徒年代のサッカーも再開になったのかもしれない。もしかしたら日本で再開するヒントとなることがあるかもしれない」と思い、バイエルン州在住の知人に連絡をとってみました。
知人の話では、**バイエルン州では**「接触制限」（会える人や人数の制限）や「距離制限」（1.5m）を保ちつつ、段階的に緩和措置がとられているとのことでした。スポーツに関しては、まず、ボディコンタクトのないスポーツ（テニスやゴルフ、卓球、陸上等）が緩和されたとのこと。さらに数日後にサッカーも、距離制限をとりつつ、大人のピッチの４分の一の広さで活動できるのは５人までの条件で、ボディコンタクトのないトレーニングならしてよいことになったとのことでした。知人は、今後も条件をつけて段階的に緩和されていくと予想していました。
ドイツはまだ学校は休校中ですが、スポーツが生活の一部になっているため、またスポーツをする場所が地域のスポーツ施設のため、このような再開が可能なのだと思いました。さらにトレーニングといっても、やはり接触をさけ、感染を少しでも防止する方向なのだと思いました。そしてさらに、トレーニングする場所やおおよその広さと人数まで規定するのはドイツ的だなと思いました。日本でも規制が緩和され、スポーツが再開される時には、ドイツのように**何らかの条件**が加えられるかもしれないとも思いました。

ドイツと日本の違いを考えていたら、GW 少し前に市内の方からいただいたメールのことを思い出しました。内容は、市内にグランドを所有しているクラブが、休校措置がでているにも関わらず、平日の日中に子どもを集めてトレーニングをしているのでやめさせて欲しいということでした。その方は密告するみたいでいやなのですがと前置きして、不要不急の外出は避ける。しかも休校措置がとられている状況で、子どもの感染を考えずにトレーニングしているのが目について**許せない**とおっしゃっていました。

このクラブは４種委員会に所属していませんでしたので、私が何かを申し上げる立場にありません。ですが一応該当クラブに連絡をとり、事実の確認をした上で、苦情があったことをお知らせしました。またメールを下さった方には、私の立場や該当クラブにお伝えした旨を報告しご理解いただきました。
この時私が考えたのは、もしどこかに自由に使えるグランドがあって、サッカーができる状況があるとしたら、私は今、子ども達を集めてサッカーをするだろうかということです。学校が休校中の平日に集めるだろうかと**自問自答**してみました。
「いやいやあり得ないな。」、どんなに保護者に懇願されても集めないと思いました。子どもがもし感染してしまったら…。ただでさえ病院は大変なのに行き帰りで何らかの事故が起きてしまったら…。まして、休校中なのだから、到底世の中から受け入れられないだろう…。
サッカーに携わり、よりよく子どもを育てたいという気持ちは同じなのにどうしてこのような違いが生まれてしまうのでしょう。考えてみると**結局のところ**「サッカーの商品化」なのだと思いました。需要と供給の理屈が優先すれば、リスクを背負ってでも平日に子どもを集めてトレーニングをすることを考えてしまうのだろうと思いました。他の、自前のグランドを持っているクラブはどうなのかと少し聞いてみました。中には上記のクラブと同じように、平日の日中に活動をしているところがありましたが、Ｊの下部組織を筆頭に、ほとんどのクラブが需要と供給の理屈を優先せずに、平日の日中はおろか通常のトレーニングも自粛していました。その結果**経営に四苦八苦**し、何とか凌いでいるというクラブもありました。異常事態にはクラブの本質が見えてくると思いました。

異常事態となり、子ども達の生活の様子も一変しました。皆さんもお気づきだと思いますが、公園で遊んでいる子ども達を多く見かけるようになりました。昔はこういう光景が当たり前だったような気がしますが、平成の後期になるにつれて公園で群れて遊ぶ子は皆無になっていました。今は、集まりすぎるのはよくないのですが、**なぜかホッとしました**。子どもってこうだよなと思いました。家にいるより友達と公園で遊ぶ方が楽しいはずです。きっと学校にも早く行きたいと思っているだろうとも思いました。人は人と接することで成長していくと言われますが、理屈よりもまずは友達と一緒にいたいんですね。離され疎でいることを強要されたことで、見えてきた子どもの本質があると思いました。
また親子でジョギングしている姿をよく見かけるようになりました。不要不急の外出は避ける、出勤も控えてテレワークにする等の施策の影響で、家で過ごす保護者が増えたのだと思います。ゆっくりと家族で過ごす時間の一つが、運動不足解消も兼ねてのジョギングなのだと思います。ジョギングしている子ども達は皆笑顔で楽しそうでした。**この笑顔**は単に体を動かすスポーツをしている喜びだけではないと思いました。皮肉なことですが異常事態は家族の絆を深めたともいえるなとも思いました。

私自身のことも考えました。なぜ、子ども達の前に立っているのだろうかと。少年サッカーに携わり、なぜ 30 年以上もサッカーの指導を続けているのだろうと。

市川市内の小学校に入学したり、転校したりしてきた子が、サッカーをやりたいと思ったら、身近に、叶えてくれるサッカークラブがある。しかも、そのクラブの指導者は、自主性を伸ばしつつ、仲間とともにサッカーを上手にしてくれる。そして人として成長させてくれる。

これは、市川市サッカー協会４種委員会の「理想の姿」（詳細は委員長通信 13 号にて）ですが、私はこの「理想の姿」を、賛同して下さる多くの方々と共に、子ども達のために追求していきたいのだと、改めて強く思いました。そしてこれからも、単一クラブのコーチとして子ども達とサッカーを楽しみつつ、市川市内のすべてのサッカー少年少女が、**心の底から**サッカーを楽しめる環境を整えていこうと思いました。

さて、指導者の皆さん。もうしばらくで、何らかの形でサッカーを再開できる時がきっときます。その時皆さんはどのように再開されますか。子ども達はサッカーをやりたくてたまらない状態です。是非ゲームから入りましょう。できれば時間の許す限り。もしかしたら、再開の条件にボディコンタクトは避ける等の密接を避ける項目が入るかもしれませんが、もしそうなったら、その条件でゲームをするにはどうすればよいか**子ども達に考えさせ**、ルールを決めさせて始めましょう。そして、「やっぱりサッカーはいいスポーツだな。みんなとサッカーをやると楽しくて仕方がないな。もっとやりたいな。」という気持ちになってくれることを期待しましょう。
私は、私自身もゲームに入れてもらい、子ども達とサッカーを楽しみたいと思います。一緒に、純粋にサッカーを楽しみながら、ややもすると忘れてしまいがちな、少年サッカー指導が育てるべきは「選手」ではなく「プレーする人」という考え方（詳細は委員長通信 １５号にて）、いわばスポーツの基本ともいえる考え方を思い起こそうと思います。そしてさらに子ども中心のサッカーを追求していこうと思います。

離れて立ち止まって、だらだらと考えたり思ったりしたことを聞いていただき、ありがとうございました。

最後になりましたが、コロナ禍に伴う、年度始めの変則的な事務手続きにご協力下さりありがとうございました。この場をお借りして感謝申し上げます。令和 2 年度は波乱の幕開けとなってしまいましたが、子ども達には何の落ち度もありません。「感染から子どもを守りつつ、子ども達がサッカーを楽しめるようにするにはどのようにすればよいか」を常に考え、皆様と知恵を絞りながら、柔軟な対応を心がけて参ります。よろしくお願い致します。